

サカグチ ダイシ

氏 名 坂口 大史

学位の種類 博士 (学術)

学位記番号 博第1101号

学位授与の日付 平成29年6月21日

学位授与の条件 学位規則第4条第1項該当 課程博士

学位論文題目 住空間に用いる内装用木材に対する認識と評価からみる建築想像論  
(Architecture Imagination Theory through Recognition and  
Evaluation of Interior Wood Used in Living Space)

論文審査委員 主 査 准教授 北川 啓介  
教授 井戸田 秀樹  
准教授 徳丸 宜穂  
教授 村上 心  
(相山女学園大学)

## 論文内容の要旨

第1章では、本研究の目的と意義を示した。また、関連する既往研究を整理した。

第2章では、本研究における研究の理論として、分析を進める上で基盤となる考え方を説明した。まず、分析対象の位置づけを行い、各章の課題の位置づけと分析方法を設定した。これら分析対象と分析方法に続いて、研究全体の流れと構成を示した。

第3章では、建築と都市における住空間を対象として、日本の専門家と非専門家に12種類の内装用木材による3個組技法を用いた個別インタビューを行った。まず、個別インタビューにより抽出した認識項目を意味の類似性と意味内容によって分類し、被験者による指摘回数と項目の小分類によるコレスポネンス分析を実行することで、被験者が木材を認識する際の着眼点を把握した。続いて、木材に対して被験者自身による認識項目の平均点に基づいて主成分分析を実行することで、内装用木材に関する認識軸を導出し、各被験者の属性における木材に対する認知構造を考察した。また、主成分分析によって得られた各木材に対する主成分スコアを分析することで、認識軸と各木材の結びつきについて考察した。最後に、主成分分析において主成分負荷量が大きかった認識項目と空間に木材を用いる際の選好性との関連に加えて、各被験者の木材に対する認知構造を合わせて分析し、各被験者の属性における木材を空間に用いる際の潜在的選択要因を導出した。

第4章では、第3章と同じく、住空間を対象として、フィンランドの専門家と非専門家に内装用木材を用いた個別インタビューを行った。個別インタビューによって抽出した認識項目を用いてコレスポネンス分析を実行することで、各被験者の属性における認識の特徴を把握し、各項目の平均点を用いた主成分分析によって、フィンランドの専門家と非専門家が木材を認識する際の着眼点を示す認知構造を考察した。さらに、空間に木材を用いる際の選好性と認識項目の相関を分析し、認知構造の考察を合わせて、フィンランドの専門家と非専門家が木材を空間に用いる際の潜在的選択要因を導出した。

第5章では、前章までと同じく、建築と都市における住空間を対象として、日本の専門家と非専門家を対象として内装用木材を用いた評価グリッド法による個別インタビューを行った。個別インタビューでは、住空間に木材を用いる際の好ましさによって、木材を5グループに分類し、評価項目を抽出した。さらに、抽出した評価項目から、ラダーリングによって上位と下位の評価項目をそれぞれ抽出することで、各被験者の木材に対する論理構造を評価構造図として作成した。続いて、抽出した評価項目をもとに、数量化Ⅲ類分析を行うことで、評価構造において重要な役割を示す評価項目の分析を行った。加えて、数量化Ⅲ類分析によって得られた評価項目のカテゴリースコアに基づいて、クラスター分析を行うことで評価構造を評価の特徴によって類型化した。これらの結果に基づき、日本の専門家と非専門家の各属性における内装用木材に対する評価の傾向を考察すると共に、建築設計やインテリアデザインに関する専門性が評価構造に及ぼす影響を論じた。

第6章では、第5章と同じく、フィンランドの専門家と非専門家を対象として内装用木材を用いた評価グリッド法による個別インタビューを行い、各被験者の評価構造を作成した。続いて、個別インタビューをもとに得られた評価項目を数量化Ⅲ類分析とクラスター分析によって分析することで、得られた評価構造を評価の傾向により類型化した。最後に、フィンランドの専門家と非専門家の各属性における内装用木材に対する評価の傾向、建築設計やインテリアデザインに関する専門性が評価構造に及ぼす影響についても論じた。

第7章では、第3章～第6章までで得られた、日本とフィンランドの専門家と非専門家の内装用木材に対する認識と評価の繋がり分析の結果から、被験者各属性における認識と評価の繋がりを、建築に対する創造的想像の意識の流れを示す「潜在志向性」と合わせて考察した。続いて、日本とフィンランドそれぞれの国の専門家と非専門家の内装用木材に対する認識と評価の繋がりや潜在志向性を横断的に比較考察することで、木を用いた建築に対する想像とその想像過程における側面を明らかにした。さらに、上記の分析結果に基づいて、木を用いた新しい建築の可能性についても合わせて論じた。

第8章では、各章の流れをまとめ、本論文の結論を総括すると共に、過去と現代の建築の潮流、社会情勢などと合わせて、建築想像論を論じた。最後に、今後の課題と展望を述べた。

## 論文審査結果の要旨

本論文は、建築空間／インテリア空間の改修において、設計者による物理的操作と改修後の空間的効果の関係に着目し、改修における設計者の物理的操作を〈改修手法〉と定義し、建造物の改修における「空間的効果」を〈付加価値〉と定義して両者の関係を研究するものであり、一連の考察を通じて、建築空間／インテリア空間の改修による活用という機能面と、デザインという意匠面にかかわる新たな評価軸を示すことを目的としている。

第1章では、本研究の目的と意義を示した。また、関連する既往研究を述べている。

第2章では、本研究における研究の理論として、分析を進める上で基盤となる考え方を述べている。

第3章では、建築と都市における住空間を対象として、日本の専門家と非専門家に12種類の内装用木材による3個組技法を用いた個別インタビューを行っている。まず、個別インタビューにより抽出した認識項目を意味の類似性と意味内容によって分類し、被験者による指摘回数と項目の小分類によるコレスポネンス分析を実行することで、被験者が木材を認識する際の着眼点を把握している。続いて、木材に対して被験者自身による認識項目の平均点に基づいて主成分分析を実行することで、内装用木材に関する認識軸を導出し、各被験者の属性における木材に対する認知構造を考察している。また、主成分分析によって得られた各木材に対する主成分スコアを分析することで、認識軸と各木材の結びつきについて考察している。最後に、主成分分析において主成分負荷量が大きかった認識項目と空間に木材を用いる際の選好性との相関に加えて、各被験者の木材に対する認知構造を合わせて分析し、各被験者の属性における木材を空間に用いる際の潜在的選択要因を導出している。

第4章では、住空間を対象として、フィンランドの専門家と非専門家に内装用木材を用いた個別インタビューを行っている。個別インタビューによって抽出した認識項目を用いてコレスポネンス分析を実行することで、各被験者の属性における認識の特徴を把握し、各項目の平均点を用いた主成分分析によって、フィンランドの専門家と非専門家が木材を認識する際の着眼点を示す認知構造を考察している。さらに、空間に木材を用いる際の選好性と認識項目の相関を分析し、認知構造の考察を合わせて、フィンランドの専門家と非専門家が木材を空間に用いる際の潜在的選択要因を導出している。

第5章では、建築と都市における住空間を対象として、日本の専門家と非専門家を対象として内装用木材を用いた評価グリッド法による個別インタビューを行っている。個別インタビューでは、住空間に木材を用いる際の好ましさに基づいて、木材を5グループに分類し、評価項目を抽出した。さらに、抽出した評価項目から、ラダーリングによって上位と下位の評価項目をそれぞれ抽出することで、各被験者の木材に対する論理構造を評価構造図として作成している。続いて、抽出した評価項目をもとに、数量化Ⅲ類分析を行うことで、評価構造において重要な役割を示す評価項目の分析を行っている。加えて、数量化Ⅲ類分析によって得られた評価項目のカテゴリースコアに基づいて、クラスター分析を行うことで評価構造を評価の特徴によって類型化している。これらの結果に基づき、日本の専門家と非専門家の

各属性における内装用木材に対する評価の傾向を考察すると共に、建築設計やインテリアデザインに関する専門性が評価構造に及ぼす影響を論じている。

第6章では、フィンランドの専門家と非専門家を対象として内装用木材を用いた評価グリッド法による個別インタビューを行い、各被験者の評価構造を作成している。続いて、個別インタビューをもとに得られた評価項目を数量化Ⅲ類分析とクラスター分析によって分析することで、得られた評価構造を評価の傾向により類型化している。最後に、フィンランドの専門家と非専門家の各属性における内装用木材に対する評価の傾向、建築設計やインテリアデザインに関する専門性が評価構造に及ぼす影響についても論じている。

第7章では、前章までの日本とフィンランドの専門家と非専門家の内装用木材に対する認識と評価の繋がりや分析結果から、被験者各属性における認識と評価の繋がりを、建築に対する創造的想像の意識の流れを示す「潜在志向性」と合わせて考察している。続いて、日本とフィンランドそれぞれの国の専門家と非専門家の内装用木材に対する認識と評価の繋がりや潜在志向性を横断的に比較考察することで、木を用いた建築に対する想像とその想像過程における側面を明らかにしている。さらに、上記の分析結果に基づいて、木を用いた新しい建築の可能性についても合わせて論じている。

第8章では、各章の流れと結論を総括し、建築想像論の考え方を過去の建築の流れや現代の潮流、社会情勢などと合わせて広く論考すると共に、本論文の今後の課題と展望を述べている。

以上の成果は、4つの日本建築学会計画系論文集（審査有り論文）へ掲載されており、建築計画や建築設計の分野において、貴重な研究成果であり、次なる展開も期待されている。

以上、本論文は、博士論文として相応しいと判断する。